

---

# サボテン

如月綺華

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

サボテン

### 【Nコード】

N4453A

### 【作者名】

如月綺華

### 【あらすじ】

ポルノグラフィティの名曲を元にして書きました。ストーリーは曲と大分違います。

## （前書き）

この小説はポルノグラフィティの『サボテン』を基盤にして書いていますが、話の展開は実際の曲と違うことを最初にお話させていただきます。曲を知っている方も、知らない方も、別のサイドからお楽しみいただけると嬉しいです。では、本編へどうぞ。

何処にいるの？　こんな雨の中  
どんなことば　待ってるの？

サボテンはただ黙って僕らを見守っていた…。

最初から、最後まで。

僕達の全部をただ、黙って…。

あの娘の出してた小さな小さなサイン、見逃した瞬間も、そのとき彼女の哀しげな顔も　　。

だから、奴だけは、誰が悪いかわってる。

そう、

この僕だっことを　　。

ねえ、僕は、まだ、この部屋に君のぬくもりを感じるんだ。  
どうして？君は、いなくなったのに…。

君が大切に育ててたサボテンは、今日は僕に冷たくて。僕を黙って見つめるだけだ。

きつと、怒ってるのかなあ。君を悲しませたから。君を、苦しめたから　　。

ねえ、帰ってきてよ。僕らこれからはきつとうまくやれるよ。

もう、君を追いつめたりなんかしない、約束する。だから。

そのときだった。

「無理だよ」

何処からか声がした。

僕はあたりを見渡す。…だが、誰もいない。

「ここだよ、窓際」

また聞こえた謎の声に従って僕は窓際に顔を向けた。

だけどそこにあるのは、あのサボテンだけ。

もしかして？

「そうだよ、俺だ」

やっぱりその声は窓際の緑のとげとげの植物から聞こえていた。

僕は窓際に近寄った。

窓の外からはざあざあと雨音が部屋の中に入り込んでくる。

「アンタはもう無理だよ。あの娘はもうアンタの元には戻って来ないさ」

サボテンは妙に低い声で僕に言った。

その姿はまるで僕を見上げているように見えた。

「なんでだよ。おまえに何がわかる」

本当は、分かってる。

奴がなぜこんな自信を持って言い切れるかなんてことは、はっきりと。

サボテンはずっとこの部屋と外界との境目から僕らの様子を見てきたんだから。

そう知りながらも僕は奴に聞き返さずにいられなかった。

だって、認めてしまえば、心の中にほんの少しだけ残ってる期待

が消え、僕は暗闇に溶けてもう二度と光を拝めなくなるような、そんな気がしたんだ。

「そうだよ、ずっと、ここから見てきた。彼女の淋しそうな顔も、全部」

サボテンには、僕の心を読む力があるのかもしれない。まるで心が見透かされたように、奴は、僕が見ないように顔を背けようとしていた事実を感情のこもっていない声色で、見えない口からじめじめと嫌な具合に湿った空気へと放った。

それは、僕の胸に突き刺さる。

「それに、いつからだったか、彼女は、俺に水をあげるときいつも憂いを帯びた脱け殻のような瞳で窓の外を眺め、俺を見なくなった」サボテンは淡々とした口調で続けた。

「たくさん水をこんなにいらなくて程俺にやるんだ。自分が水をやっていることを忘れたように　心が何処かに飛んでいったように……」

そうだ。あの娘は、溢れるくらいの水をやってた。

「それは、彼女の、最後のサインだったんだよ」

「彼女はあの遠い日を思ってたんだ。アンタとの楽しかった日を」

君の声が聞きたくて、ときどきと心臓が飛び出る程緊張しながら何度も握った電話、笑顔を見るためにわざとやったドジ、逢いたいからって、口実に今はやりの映画のチケットを握りしめ、君を誘ったあの日　。　今までなぜか忘れていた、楽しかった日々が、走馬灯のように、僕を駆けぬけていった。

君と共に過ごせた日に僕が小踊りしそうな程喜んでたのも、ずっと一緒にいたくて、二人で住もうと、この部屋で彼女に言ったことも、サボテンは、みんな見ていたんだな。

それが、いつしか君を何処かに誘ったりなんかもしなくなった。  
終には彼女の誘いも

「疲れてる」

「別に家でいいじゃん」

としはしば断るようになっていた。

彼女との時が”当たり前”の日常となって、その価値を忘れていった。

急に懐かしくなって、そして、苦しくなって、淋しさと後悔が同時に込み上げてきた。

君は、僕にとって、『なくてはならない存在』でした。

君がいてくれてたから、あんなに楽しかった。君が、笑っ

てくれていたから、どんなに辛いことも乗り越えてこれたんだ。

なんで、気付かなかったんだろう…もっと、早く。

「やっと見つけてくれたんだね」

サボテンはほんの少し声を和らげた気がした。

心なしが先程まで低かった声がだんだん高くなっていつてるよう  
な。

「思い出してくれたんだ、あの日々のこと。毎日が楽しかったよ。  
あなたと一緒にふざけて、笑い合ってた」

だんだん声が高くなる。

「あたしがいなくなって悲しんでくれるんだね。もう、嫌いになっ  
ちやったのかと思った」

僕は気付いた。

その声は、紛れもなく…。

面影を残し、出ていった、あの娘。

「嫌いになったんじゃない。ただ、君のやさしさに、恋人という立場に甘えてしまってただけ」

僕が言った言葉は、やけに言い訳がましく雨音と混じって部屋に虚しく響いた。

「でも、もう遅い。あたしたちはあの頃には戻れないでしょ。あの、何も意識しなくても二人が楽しかった日々には…。だから、今の気持ちだけは、忘れないでいて」

そして、その愛しい声は、最後にこう、残した。

「ほんとうに、大好きだったよ」

その言葉と僕の頭の中の彼女の笑顔とが重なってゆっくりと遠ざかっていく。

「お願いだっ、待ってくれっ」

僕はそう叫びながらソファから飛び起きた。  
夢。

どうやら彼女の去りぎわを何度も繰り返し思い起こしている合間に転寝してしまったようだった。

僕は窓際に駆け寄った。

あのサボテンは  
いつもと同じように黙ったままだった。

きつと、サボテンは僕に警告してくれたに違いない。君の大切さを思い出させるために。

僕は窓を開けて空を仰いだ。



窓からは雨上がりの独特のさわやかな風が入ってきた。

さあ、今すぐ君を迎えにいこう。

そして、愛していると伝えてみよう。

きっと、まだ、間に合う。

そう信じ、僕は玄関のドアを開けて、雨降後の少しだけ湿った空気の中にはき慣れたスニーカーを踏み出した。

（後書き）

最後までお読み頂き、ありがとうございます。どうでしたでしょうか。晴一さんの歌詞とはまた違った感じになったかもしれないです。最後曖昧にしましたが、私の頭の中では、あの後、彼は結局、彼女を失うという結末になってます。でも、やっぱりそれじゃあ、ということで、結末を省きました。皆様がそれぞれ好きなように素敵な結末を思い描いてくだされば感激です。曲を元にして書くのも、楽しかったので、機会があればまた書いてみたいと思います。それでは。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4453a/>

---

サボテン

2010年10月10日04時20分発行